



「下村満子の生き方塾」ニュース

【号外】2019.09

—2019年8月合宿速報版①—



正面に「『下村満子の生き方塾』合宿ご一行」と書いた名札が張ってある大型貸切バスで、中間貯蔵施設や第一原発を視察

原発事故「後始末」と自然エネルギー

——— Jヴィレッジ拠点にしっかり学ぶ

「下村満子の生き方塾」は2019年8月23日から25日まで、福島県楡葉町のJヴィレッジをベースにして、2泊3日の夏合宿を開きました。塾生や応援団43人が参加し、原発事故とその「後始末」である廃炉作業、原発に代わる自然エネルギーなどについて学びました。過密スケジュールにもかかわらず、「生き方塾」を構成する柱の一つである坐禅も、しっかり行いました。塾生であり、(株)エイブル社長の佐藤順英（ゆきひで）さんの好意で、交流会は大歓声が湧き上がるカラオケ大会も行うなど、「静」と「動」が織り込まれた、これまでにない合宿となりました。また下村塾長には初日の乾杯ドリンク、最終日ワンダーファームでの食事代を援助してもらい、参加者は、あらためて塾長、佐藤社長に感謝しました。上中下の3回で、盛りだくさんで濃密だった夏合宿を、ニューズレター号外で速報します。
(写真・文責・構成/皆川猛)

●廃炉作業は、^{はいろ}「灰色」だけ

首都圏方面からの塾生、応援団は、23日午後1時15分着の特急ひたち9号に乗車し、いわき市の塾生・菅野寿男さんが、いわき駅で一行を出迎えました。一行は2時過ぎ、Jヴィレッジのバスで、Jヴィレッジに到着。夏合宿は始まりました。

下村塾長は「廃炉作業に従事し、東電の信頼も厚い佐藤社長のお陰で、第一原発の状況や廃炉に向けての取り組みや、民間では初めて、中間貯蔵施設内視察をすることができます。百聞は一見に如かずと言います。事故現場を自分の目で見て、原発問題を考えて下さい。」と、開会と歓迎の挨拶をしました。

続いて、合宿実行委員長の佐藤さんが「今回の合宿は、中馬真理子秘書が実務を担当してくれたから実現しました。大震災、原発事故から8年経過しました。爆発事故現場の後片付けはようやく一段落して、いよいよ廃炉という新たなステージが始まります。いいタイミングでの原発視察だと思います。廃炉作業は『灰色』ですが、皆の笑顔があれば明るくなります。放射線管理はきちんとやっているから、安心して見学してほしい」と、参加者の放射能への不安を取り払い、視察の意義を強調しました。

「生き方塾」が発足したのは、大震災・原発事故から1カ月後の2011年4月17日。発足当時の事情を知らない若い塾生、当時の事を忘れかけている塾生のために、保存している当時のDVDを上映しました。ピッコロ・バイオリンのセドフさんの演奏会、グライ・ラマ法王の講演、大震災の1年後に始め、5年間続けた、鎮魂のための「福島を忘れない！祈りの集い」などを見て、「あの頃」に思いをはせました。

引き続いて見たのはNHKスペシャル「原発メルトダウン～危機の88時間」のDVDでした。2011年3月11日に起きた東日本大震災で津波が発生、福島第一原発の電源は全て失われ、1号機が最初にメルトダウンし水素爆発を起こし、13日には3号



歓迎の挨拶を述べる下村塾長



時宜を得た視察だと、エイブルの佐藤社長



合宿の拠点となったJヴィレッジ。快適に2泊できた

機がメルトダウンし水素爆発。14日には2号機がメルトダウンするということ、人類がかつて経験したことのない事態に直面しました。この88時間をドラマで再現した内容でした。事故から5年後の2016年に放送されたものです。

この番組では、想定を超えた巨大津波がメルトダウンの原因という、東電の説明をベースにしていますが、今年（2019年）8月発行の「文芸春秋」9月号には、少なくとも1号機は地震発生3分後には、ジェットポンプ配管が壊れて、そこから冷却水が流出し、メルトダウンは津波が来る前から始まっていたという、元東電の炉心専門家の話が出ています。具体的な説明であり、素人でも分かりますから、参考にしてください。安全より利益追求を第一とする東電経営陣の実態も描かれています。

現場を見ることは、ありがたい

石崎さん講義



「原発メルトダウン」上映

「原発メルトダウン」上映

DVD上映の後、去る3月の勉強会で「今だから言える、生き証人として内部から見た、福島原発事故の実態」と題して講義していただいた、元東電副社長で、福島復興本社の代表を務めた石崎芳行さんが講演しました。冒頭、石崎さんは「皆さんが、現場に行って、つぶさに見て下さるのは、本

①自分は事務屋です。事務屋の自分が、なぜ福島第二原発の所長になったのか。東電はトラブル隠し、データ改ざんなど、原発をめぐる問題が多く、3か所ある原発のうち、1つは事務屋の所長にしようという流れで第二原発の所長に就きました。所長時代は地域を回って、下請け企業、地域住民と付き合いを深めて、本音で話をするように努めました。第一原発事故発生後は、13年11月、原子力被災者支援を担う「福島復興本社」の初代代表兼東電執行役 副社長に就き、17年に福島担当特別顧問、18年に退職しました。

②会社を辞めてから1年間遊びましたが、被災した地元を放っておけない気持ちが高まっていたころ、榎葉町長から「町の復興に力を貸してほしい」と言われて、アドバイザーの役職に就きました。

③Jヴィレッジは1997年、東電が130億円を投じて建設し、電源開発で世話になっているからと、福島県に寄付したスポーツ施設です。当時、国からは、電源交付金で地元は潤っているのだから、130億円の施設を寄付することは二重払いだと、難癖を付けられました。

④でも、Jヴィレッジがあって本当によかった。原発事故収束の前線基地になったからです。今は天然芝生が眩しいグラウンドですが、事故後は芝生を剥ぎ取り、駐車場や



安全性追究の努力が足りなかった、と石崎さん

機材置場などに使っていました。復興本社は「ヴィレッジ」にあり、5年間ゴースタウンになった街を、徒歩で通勤しました。この時、自分の生涯をかけて復興させないと、双葉郡は地獄に落ちると考えるようになりました。

⑤双葉郡8町村の住民帰還率は、ざっと20数%です。ばらつきが大きいのですが、楡葉は54%、富岡は8%、大熊はごくわずか、双葉、浪江はほぼゼロです。荒廃している現実を見て欲しい。

⑥DVDを見ての感想ですが、吉田昌郎所長がいた部屋は、もっと壮絶でした。自分は本社勤めしていたので、かつての職場、第二原発に激励に行きました。第二原発は、タッチの差で幸い事故は免れましたが、それでもみんな疲弊していました。第二がそういう状態だったから、第一の厳しさは推して知るべし、です。

⑦なぜ未曾有の事故が起き、防ぐことができなかったのか？リスクの大きい原発を扱う人たちは、安全性を高める努力、安全性確保に対する想像力が欠落してからだと思えます。宇宙実験「はやぶさ」の時は、これが駄目ならどうなのか、どうなんだと、ではどうするのかと、リスクに対して数万回も問いかげやシュミレーションをして、絶対大丈夫という確信を得てから、挑戦したと聞いています。原発でも、常にリスクを想像し、どうすればそれを回避できるのか、追究する努力が足りなかったと思えます。

⑧今、町の復興、町づくりで、昔付き合った人たちと顔を合わせていますが、皆「ご苦労様」と声を掛けてくれます。これに報いるためにも、双葉郡8町村にできた、行政の手が届かないところを復興させる街づくり会社を

連携させて、復興を進めたい。連携組織は「フタバエイト」。各自治体が個別にやっていると、うまくいきません。

⑨アメリカのワシントン州には、ハンフォードという町があります。ここはプルトニウム原爆を作る工場があり、放射性廃液は川に垂れ流し、廃棄物は野ざらしにするなど、全米一の放射能汚染地域でした。しかし、住民の努力によって、30年かけ、町を蘇生させました。人口も増えています。この成功は、民間が中心となった広域連携です。

⑩私たちが目指すのは、ハンフォードをモデルにしながら、双葉郡8町村の連携で、30年よりもはるかに短い時間で新しい街をつくることです。事故に遭ったこの地を、決して見捨てないでほしい。

この後、次のような質疑応答がありました。

Q 廃炉作業にはどのくらいの年数が掛かるのか？

A 国は、30年はかかると言っていますが、もっとかかると思う。第二原発の廃炉も、どのくらいの年数とお金が掛かるか全く分からない。

Q 原発はこの際、全て止めるべきなのに、再稼働する原発が増えている。どう思うか？ロスチャイルド家を中心にするウラン・シンジケートからの「押し付け原発」を止めさせることが、東電OBの責任だと考えるが…。

A 日本は資源がない国。自然エネも含めて、使えるエネルギーは全て使う。そういう意味で、原発を捨てるのは難しいと思う。原発なしで、自然エネルギーだけで済むなら、これほど楽なことはない。しかし、東電に原発を扱う資格があるのかという思いは強い。まだまだ努力が必要だ。

トップが決断すれば、原発やめられる

応援団3氏コメント



誤りに気づいたら改める、と吉原さん

濱田総一郎副塾長が乾杯の音頭を取って、松花堂弁当の夕食を取りました。この後、今年3月にNHKが放送したE TV特集「誰が命を救うのか？ 医師たちの原発事故」と題したDVDを上映しました。第一原発の事故発生直後、福島に入っていた医師たちの苦闘を描写したものです。



安全なら東京に原発を、と佐藤さん

「安全神話」のもと原発事故時の医療の準備はほとんどなく、国の指揮命令系統は混乱に陥っていました。そんな中、汚染された住民の対応、爆発で負傷した自衛隊員の治療など、最前線で奔走した医師たちには、命をめぐる重い判断がゆだねられました。数千に



女性の感性を大切に、と湯川さん

及び医師たち自身の撮影による写真と映像から、当時の医療現場のすさまじい実態が明らかにされました。

引き続き、応援団の吉原毅（原自連会長）、湯川れい子（音楽評論家）、佐藤弥右衛門（会津電力社長）の3氏が、以下のように、それぞれ意見を表明しました。

吉原毅さん

第2次大戦の時、日本は負けることを知りながら、ずるずると戦争にのめり込んでいきました。現場にいた軍のトップたちは、おかしい、これでは駄目だと分かっているながら、戦争を止めることができませんでした。流れに抵抗する勇気がなかったのです。原発もこれと同じです。

放射性廃棄物を捨てるごみ箱がない、地震大国の日本では原発は危ない、と分かっているにもかかわらず、なお原発にしがみついています。リーダーなら、小泉元総理のように、責任を持って危険な原発を止める決断をすべきなのです。

自然エネルギーがあるのですから、間違いに気づいたら直ちに止めるべきなのです。

佐藤彌右衛門さん

会津電力という、自然エネルギーを使った地産地消の電力会社をやっている佐藤です。会津盆地は千葉県と同じ面積を有し、食糧自給率は1000%を超えている自然豊かな地です。猪苗代湖の水を使えば、500万^{キロワット}の発電ができます。福島県内の電力使用量は150万^{キロワット}ですから、猪苗代の水だけで、福島県はエネルギー問題から解放されるのです。危険な原発の見返りとして、30年間で原発立地交付金が落ちました。安全なら東京に原発を置いた方が、利益は出るのです。送電ロスがありませんから。そして、2011年原発が爆発しました。

私の祖父は、3つのことを覚悟して生きる、と諭していました。一つ目は、「天変と地震」、二つ目は、「経済恐慌」、三つ目は、「戦争」です。教え通り、地震がやって来ました。未曾有の事故となりました。原発事故の避難指示対象になった飯舘村では、使えなくなった土地で太陽光発電をしています。採算は、バッチリ採れています。電力会社のトップが決断すれば、原発という負のスパイラルから脱却できます。

湯川れい子さん

ジャズの評論を始めてから59年、反核運動は1959年からやっています。長く音楽業界に身を置いているが、俳優が反政府の姿勢を見せたら、業界から干される怖さを十分見て、体験もしました。反核運動に関わるようになったのは、ティーンエイジャーのころ、湯川秀樹博士の考えに出会った時です。湯川博士は、原爆と原発は双子の兄弟であり、制御できない原子力を使った時、地球にどう責任を取るのか、と問い続けていました。そこで私は、高木仁三郎さんの指導を受けて、勉強しました。息子はアトピー性皮膚炎に悩んでおり、原因は飲料

水にありました。そこで環境問題に取り組むようになり、国から原子力を含む環境問題を考える委員に委嘱されましたが、24人の委員のうち、18人は原子力関係の人たちで、私たちはガス抜きのような存在でした。1999年の、東海村JCOで臨界事故が起きた時のことです。委員会で、ウラン溶液という危険な物をひしゃくで汲むおかしさを指摘すると、原子力の学者たちから、逆にバカにされたのです。原子カムラの閉鎖性を思い知らされたのです。おかしなものはおかしい、と感じる感覚が大事なのです。感性が鋭いのは女性です。原発という危険な代物をどうするのか、デシジョンメイキングの場に女性がいないのは問題であり、原発ゼロを争点にして選挙を行えば、原発はなくなります。



恒例の坐禅で、学びを落とし込む

合宿初日の締めくくりは、坐禅です。意見の発表や意見交換がヒートアップしたために、一柱だけの坐禅でしたが、勉強会で学んだことを、心に落とし込むには絶好の時間でした。

「壮大なる無駄」見せつけられる

●低木がはびこる元耕地

2日目は、朝8時40分に集合し、中間貯蔵施設、第一原発構内視察に向かいました。視察・見学を円滑に行うために8つの班に分けて、「『下村満子の生き方塾』合宿ご一行様」と書かれたパネルを掲げた大型バスに乗り、最初に向かったのは、大熊町にある放射性廃棄物中間貯蔵施設。道中、佐藤社長は、大熊町の現状などについて「名ガイド」ぶりを披露し、参加者の絶賛を浴びました。同町は、帰還困難区域と避難指示解除区域が混在しており、その明暗ぶりに驚くばかりでした。

時代劇に出てくる閉門塾居の家のように、出入り口に×の字のようにポールを組んだ家は、雑木が生い茂り、ジャングルの様な有様です。8年間耕作を放棄した田畑は荒れ放題で、田には低木がすくすくと成長しています。これでは、よほどの重機を使わなければ、田に戻すことはできない現実を目の当たりにしました。あらためて、



佐藤さんの名ガイドぶりに感心する参加者

大自然の強さを見せつけられました。一方、住民が帰宅した家は、建て直しをしたところが多く、原発事故に被災したとは思えません。



人が住まないところはジャングル化している



処分を待つ膨大な黒いフレコンバッグ。
この中に除染で出た汚染土壌が入っている



中間貯蔵工事情報センターで丁寧な説明を受けたが

中間貯蔵施設の情報センターは、誰でも見学できますが、「生き方塾生」は、通常は見学が難しい、広大で輸送トラックが行き交う施設内部に入ることができました。民間でこの施設に入場したのは、私たちが最初です。

施設の様子、実態は、吉原毅さんが原自連の幹事会メ

ンバー全員に、報告したのでそれを掲載します。

——土曜日（8月24日）は、まず中間貯蔵施設を訪問。中間貯蔵工事情報センターは、JESCOが運営説明を行っており、画像や展示制作物を用いて、詳しく説明して下さいました。

福島第1原発を囲む大熊町と、双葉町、楡葉町にわたり、広さが東京ドームの340倍の16平方キロメートル。ここに、除染した放射能汚染土壌や1キロメートル当たり10万ベクレルを超える放射性セシウム濃度の焼却灰などを30年間貯蔵します。

現地に行ってみると、膨大な土地にフレコンバッグから出された土壌を埋め、ロードローラなどで固めていく作業が行われておりました。ホコリがあがらないように水をかけながらの作業と言う説明がありましたが、現場を見ると土ほこりが舞う中で作業が続けられており、マスクをして作業している方々の健康障害が気になります。



山積みされているフレコンバッグ。しかし、30年後に汚染土壌を運び出すのは現実問題として無理だろう

また土壌を埋設処理する下には 30 年ほもつという五重のシートが敷かれており、雨水などを通して放射性物質が環境に出ないように、モニタリングをしているとのことでしたが、果たして大丈夫なのかという懸念は消せません。

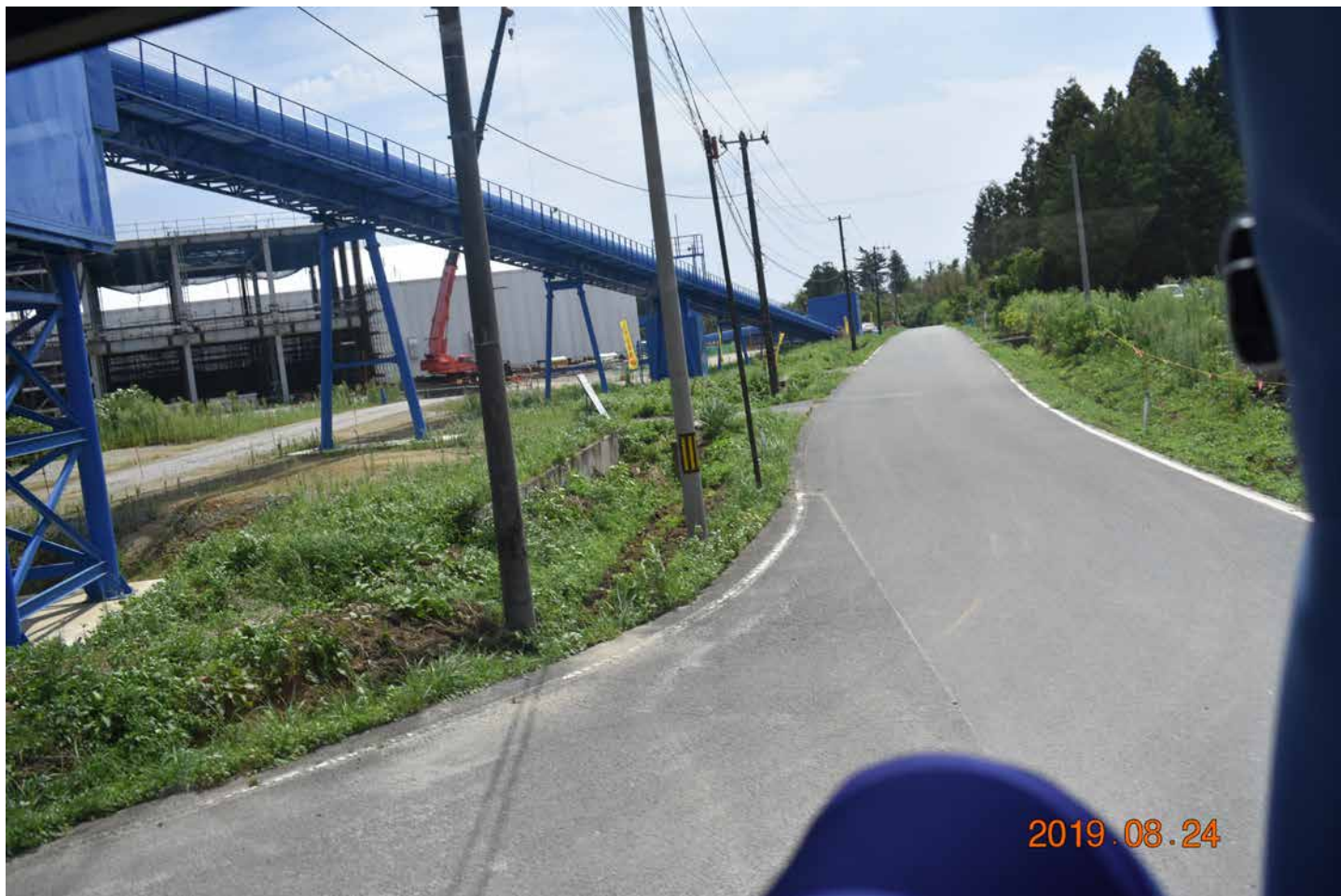
もっとも大きな疑問は、これらの膨大な土壌を、30 年後になって、再度掘り出し運搬して、県外の最終処分場に持ち出す、という説明は、とても信じられないことであり、住民を納得させるためのフィクションとしか思えなかったことです。

もう一つは、パンフレットや展示にこっそりと記載されていることですが、1 キロメートルあたり 8000 ベクレル以下の汚染土壌は、再生資材として利用すると、さも当たり前のように書いていることです。8000 ベクレルという十分に汚染された放射性物質が、再生資材として「全国の公園や住宅の地面の下に使われる」ことを環境庁が、特別措置法を制定して、実行しようとしているのです。全国に放射性物質をばらまく環境庁とは何だ？ 誠に恐ろしいことです——

●中間貯蔵は永遠貯蔵？

原発事故がなかったら、このような貯蔵施設は必要ありません。除染、汚染物質運搬、施設建設費と事業費は最終的に 12 兆円と試算されているようですが、あくまでも見込みであってさらに増えるでしょう。この資金は税金であり、事故がなかったなら、12 兆円は国民のために有効活用できます。何という壮大な無駄でしょう。潤うのは大手ゼネコンばかりです。中間貯蔵施設はあくまで貯蔵であって、30 年後 2047 年までには、福島県外の最終処分場に運び出すと言っていますが、そんなことはできないでしょう。30 年後に中間処分場建設を決めた役人、政治家は生きていないし、放射性ゴミ捨て場に対しては、低レベルであっても、引き受ける自治体はありません。

それでも原発再稼働を促進する国。国民はバカにされている気がしてなりません。



敷地内各所では汚染物質を運ぶベルトコンベアが見られる。最新鋭というのだが、何かを生み出す前向きの技術ではないだけに、最新鋭の言葉がむなしく響く